

平成23年9月21日

「第8回文化庁映画週間 - Here & There」の開催

文化庁では、魅力ある総合芸術であり、かつ海外への日本文化発信の有効な媒体である日本映画の振興に、様々な観点から取り組んでいます。その一環として、今回8回目となる「文化庁映画週間」を東京国際映画祭期間中に開催し、優れた文化記録映画や永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰するとともに、シンポジウムやトークイベントなどを実施し、あらゆる立場の人々が映画を通じて集う場を提供します。（東京国際映画祭事務局同時発表）

1. 会 期

平成23年10月22日（土）～10月29日（土）

2. 場 所

六本木ヒルズ、シネマート六本木（港区）

3. 主催等

主催：文化庁

共催：公益財団法人ユニジャパン

協力：一般社団法人日本動画協会

一般社団法人日本アニメーター・演出協会

4. 実施事業の概要

裏面参照

文化庁文化部芸術文化課

課 長 山 崎 秀 保（内2822）

調 査 官 佐 伯 知 紀（内2829）

担当係長 藤 澤 和 寛（内2083）

【代表】03-5253-4111

【直通】03-6734-2083

文化庁映画週間URL <http://bunka-cho-filmweek.jp/>

実施事業の概要

平成23年度文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会

・・・P3～参照
(主催／文化庁)

【贈呈式】

日程：10月22日（土）18：00～

会場：六本木ヒルズ グランドハイアット東京 2F コリアンダー

優れた文化記録映画作品を顕彰する文化記録映画部門および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰する映画功労部門の贈呈式を実施します。

【受賞記念上映会】

日程：10月23日（日）10：50～

会場：シネマート六本木 スクリーン1

文化記録映画部門受賞3作品の受賞記念上映会を実施します。

シンポジウム－MOVIE CAMPUS－

・・・別紙参照

(主催：文化庁／共催：公益財団法人ユニジャパン／協力：一般社団法人日本動画協会、一般社団法人日本アニメーター・演出協会)

日程：10月28日（金）第一部：13：00～ 第二部：15：20～

会場：六本木アカデミーヒルズ49 タワーホール

「シンポジウム－MOVIE CAMPUS－」は国内外の映画製作活動や上映活動において、新しい取り組み事例や旬な映画文化の流れをアカデミックな視点で紹介するシンポジウムです。本年度は「映画でつながろう」をキャッチフレーズに、二部構成での実施を予定しています。第一部では、アニメーションに焦点をあて、アニメーション映画の制作において、これから求められているもの、取り組むべき課題、目指すべき方向についてディスカッションを行います。また、第二部では、映画の力を見つめ直しつつ、新たに人と映画をつなげる取り組みやその可能性を探っていきます。

映画ナビゲーターズ

・・・別紙参照

(主催：文化庁／共催：公益財団法人ユニジャパン)

日程：10月24日(月)、29日(土) 19:00～20:00(予定)

会場：TIFF movie café

映画ナビゲーターズは東京国際映画祭(TIFF)期間中にオープンする TIFF movie caféにて開催する映画カルチャートークイベントです。映画業界以外で活躍するゲストを招き、“映画で学ぶ、映画で知る”をコンセプトに、独自の視点や語りを通じて、映画作品が持っている奥深さや世代を超えた楽しみ方の秘訣をナビゲートしていただきます。

(参考) 第24回東京国際映画祭開催概要

期間：平成23年10月22日(土)～10月30日(日) 9日間

会場：六本木ヒルズ、シネマート六本木等

企画内容に関する詳細お問い合わせ先

公益財団法人ユニジャパン TEL 03-3553-4792 FAX 03-3553-4788

※文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会の詳細

平成23年度文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会

文化庁では、我が国の映画の向上とその発展に資するため、文化庁映画賞として、優れた文化記録映画作品（文化記録映画部門）および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々（映画功労部門）に対する顕彰を実施しています。

文化記録映画部門では、選考委員会における審査結果に基づき、次の3作品（文化記録映画大賞1作品、文化記録映画優秀賞2作品）を受賞作品として決定しました。各作品の製作団体に対して、文化庁映画賞として賞状及び賞金（文化記録映画大賞200万円、文化記録映画優秀賞100万円）が贈られます。

また、映画功労部門についても次のとおり6名の方を受賞者として決定し、それぞれ文化庁長官から文化庁映画賞が贈られます。

【贈呈式】

日 時 平成23年10月22日（土）18：00～
会 場 六本木ヒルズ グランドハイアット東京 2F コリアンダー

【受賞記念上映会】

日 時 平成23年10月23日（日）
10：50～『夢と憂鬱～吉野^{けいじ}馨治と岩波映画～』
14：10～『里湖^{さとうみ} 八郎瀉物語』
17：00～『シヨージとタカオ』

会 場 シネマート六本木 スクリーン1

【平成23年度文化庁映画賞受賞一覧】

＜文化記録映画部門＞

文化記録映画大賞	作品名	シヨージとタカオ
	製作者名	井手 洋子
文化記録映画優秀賞	作品名	里湖 八郎潟物語
	製作団体名	株式会社 群像舎
	作品名	夢と憂鬱～吉野馨治と岩波映画～
	製作団体名	記録映画「夢と憂鬱－吉野馨治と岩波映画」製作委員会

(作品名50音順)

【文化記録映画部門贈賞理由】

『シヨージとタカオ』監督：井手 洋子 2010年／158分

1967年に茨城県・布川で起こった強盗殺人事件。その罪に問われ、29年間を獄中で過ごした桜井昌司さん（シヨージ）と杉山卓男さん（タカオ）が仮出所してからの14年間をカメラに収めたドキュメンタリー。このふたりが再審公判を勝ち取るまでの過程を軸に、社会にコミットしてゆく中年男の等身大がゆるやかに立ち上がる。冤罪、司法のあり方、失われた時間——等、深刻な問題を孕みながらも、それを決して声高に掲げることなくふたりに寄り添い、ふたりを凝視める視線が想定外の人間像を浮き彫りにするさまが出色。 <明智 恵子>

『里湖 八郎潟物語』監督：岩崎 雅典 2011年／88分

水1升到魚7号”、魚湧くといわれ、かつて琵琶湖に次いで日本で二番目に大きな湖だった八郎潟は、戦後の食糧増産を目的に、巨費を投じて干拓され、五分の一の調整池となる。その後も減反政策や水質の悪化など歴史の波に翻弄された八郎潟の全貌を、数々の動物映画の名作で定評のある岩崎雅典監督が丁寧に活写している。再生されつつある生態系に東日本大震災以降の微かな希望を見出すのは筆者だけだろうか。 <野村 正昭>

『夢と憂鬱～吉野馨治と岩波映画～』監督：桂 俊太郎 2011年／122分

記録映画保存センターが集めた資料を活用し、同センターと東京大学が共同製作した。優れた作品を残し、1998年に半世紀に及ぶ歴史の幕を閉じた岩波映画。その創設者吉野馨治と岩波映画の歩みを、資料映像と関係者の証言でたどる。理想と情熱にあふれた出発点、そこから輩出したキラ星のような人材。時代を映す作品群。そして科学を信奉しながら、スモンという病に侵された吉野の運命の皮肉。記録映画を切り口に、現代史の一側面を描き出した。 <勝田 友巳>

※＜ ＞内は執筆した選考委員名

＜映画功労部門＞

氏 名	年齢	分 野
岡安 和子（おかやす かずこ）	75	フィルムネガ編集
金田 正（かなだ ただし）	74	スチール
兼松 熙太郎（かねまつ きたろう）	74	映画撮影監督
小林 七郎（こばやし しちろう）	79	アニメーション美術
笹竹 利行（ささたけ としゆき）	73	映画美術文字デザイン
高嶋 利雄（たかしま としお）	88	映画照明

（敬称略・氏名50音順）

【映画功労受賞者功績】

岡安 和子

昭和30年に日活撮影所製作部編集課にネガ担当として入社。前年に東京都調布市に新設された同撮影所は東洋のハリウッドと呼ばれる威容を誇っていた。ネガ編集とは作品の原基となる完成ネガを作製する映画製作の最後の工程であり、細心かつ堅実な取組が必要とされる仕事である。同45年日活を退社後は、三船プロダクション等で活躍し、同54年に映画、テレビ等の映像編集会社、岡安プロモーションを設立し今日に至っている。担当作品に「戦国自衛隊」（斉藤光正 昭54）「金田一耕助の冒険」（大林宣彦 同54）「檜山節考」（今村昌平 同58）「黒い雨」（今村昌平 平元）「あの夏、いちばん静かな海」（北野武 同3）「うなぎ」（今村昌平 同9）「ゴジラ2000ミレニアム」（大河原孝夫 同11）「鏡の女たち」（吉田喜重 同15）などがある。

金田 正

昭和34年に松竹に契約者として入社、京都撮影所の宣伝部・スチール係に配属され、翌35年「命との対決」（酒井辰雄）でスチールマンとしての第一歩を記す。スチールは、ポスターのメインビジュアルはもちろん、チラシ、プレス、新聞広告などを飾る映画作品の分身であり、映画の宣伝に必要不可欠のツールである。同37年に大船撮影所に異動後も一貫してスチールを担当し、その後も大島渚、斎藤耕一、深作欣二、中村登、山根成之、野村芳太郎、木下恵介監督たちの名作の名場面を静止画で撮り続ける。なかでも、山田洋次監督作品に関しては「男はつらいよ」シリーズの第41作「男はつらいよ 寅次郎心の旅路」で初めてスチールを担当して以降、欠かせない存在となり、今も現役を続行中である。主な担当作品に「帰って来たヨッパライ」（大島渚 昭43）「思い出の指輪」（斎藤耕一 同43）「君が若者なら」（深作欣二

同45)「愛と死」(中村登 同46)「同棲時代—今日子と次郎—」(山根成之 同48)「砂の器」(野村芳太郎 同49)「新・喜びも悲しみも幾歳月」(木下恵介 同61)「男はつらいよ 寅次郎心の旅路」(山田洋次 平元)「おとうと」(山田洋次 同22)がある。

兼松 熙太郎

昭和32年松竹大船撮影所撮影課に入社。小津安二郎監督の晩年の名作「彼岸花」(昭33)「お早よう」(同34)「秋日和」(同35)の現場につく。他にも「秋津温泉」(吉田喜重 同37)「乾いた花」(篠田正浩 同39)「紀ノ川」(中村登 同41)の現場をこなした。同45年退社後に撮影監督となり、劇映画、テレビ映画、CF、大型映像などを手がけて幅広く活躍する。この間、日本映画撮影監督協会にあっては、同63年に理事に選出され、その経営の健全化に貢献、平成10年には副理事長、同14年には理事長に就任した。日本映画の国際化と人材育成を主眼とした事業を多く提案し、なかでも、協会自らが後継者の育成を目指した「撮影助手育成塾」の立ち上げに尽力、塾長を務めるなど主導的立場でプロジェクトをリードしている。同塾は今年度で8期目を迎え、高い評価を受けている。主な映画作品に、「冒険者たち」(臼井高瀬 昭50)「渚の白い家」(斎藤耕一 同53)「不良少年」(後藤幸一 同55)「海よお前が—帆船日本丸の青春—」(蜷川幸雄 同56)「生きてはみたけれど 小津安二郎伝」(井上和男 同58)「自由な女神たち」(久世光彦 同62)がある他、多くのジャンルをこなしている。

小林 七郎

昭和41年東映動画に入社。同43年有限会社小林プロダクションを設立し、TVシリーズの名作といわれる「ガンバの冒険」(昭50)を初め、アニメーション史に残る数多くの名作を手懸けた。常にアニメーションの新しい美術の在り方に挑戦し創造し続けた姿勢は次代の担い手にも影響を与え、指導者としても、現在第一線で活躍する多くの優秀な美術監督を輩出しており、アニメーション界への貢献は非常に大きい。平成20年からは、神戸芸術工科大学の客員教授も務めている。主な映画作品に「ルパン三世 カリオストロの城」(宮崎駿 昭54)「家なき子」(出崎統 同55)「あしたのジョー2」(出崎統 同56)「うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー」(押井守 同59)「冒険者たち ガンバと7匹のなかま」(出崎統 同59)「タッチ 背番号のないエース」(杉井ギサブロー 同61)「少女革命ウテナ アドゥレセンス黙示録」(幾原邦彦 平11)などがある。

笹竹 利行

昭和33年東宝に入社し、撮影所の美術課に配属となる。以降50余年にわたり、字書き一筋で様々な文字を手掛けてきた。字書き（映画美術文字デザイン）とは、映画の画面に映る文字を書く職種で、タイトル、看板、標識、文書や書状など様々な文字を手掛ける仕事である。多様な書体をこなし、字型やバランスの美しさが評価され、多くの作品を担当し、今もなお現役で話題作に携わっており、またその仕事を通して、若手助手の育成にも努めている。主な作品に、「天国と地獄」（黒澤明 昭38）「居酒屋兆治」（降旗康男 同58）「帝都物語」（実相寺昭雄 同63）「陰陽師」（滝田洋二郎 平13）「ALWAYS三丁目の夕日」（山崎貴 同17）「武士の一分」（山田洋次 同18）「母べえ」（山田洋次 同20）「沈まぬ太陽」（若松節朗 同21）などがある。

高嶋 利雄

北辰電機製作所での勤務を経て、昭和20年東宝撮影所に入社し、照明助手となる。昭和32年の豊田四郎監督の「夕凧」で照明技師を務めて以降、岡本喜八、本多猪四郎、千葉泰樹、古沢憲吾、堀川弘通、森谷司郎監督ら、東宝作品54作品を担当した。昭和44年の日本映画照明技術者協会（後日本映画・テレビ照明協会）の発足に際しては出版担当の理事となり、機関誌「映画照明」（後「映像照明」）の発行に尽力した。平成2年から同5年までは事務局長を務め協会運営に手腕を発揮した。また、日本映画学校（現日本映画大学）で講師を務めるなど、後進の育成にも力を尽くした。主な担当作品に、「結婚のすべて」（岡本喜八 昭33）「モスラ」（本多猪四郎 同36）「二人の息子」（千葉泰樹 同36）「キングコング対ゴジラ」（本多猪四郎 同37）「君も出世ができる」（須川栄三 同39）「さらばモスクワ愚連隊」（堀川弘通 同43）「潮騒」（森谷司郎 同46）「八甲田山」（森谷司郎 同52）などがある。

<参考>

平成23年度文化庁映画賞選考委員

【文化記録映画部門】

明 智 恵 子	キネマ旬報編集長
勝 田 友 巳	毎日新聞社学芸部記者
谷 川 建 司	早稲田大学政治経済学術院客員教授・映画ジャーナリスト
中 嶋 清 美	公益社団法人映像文化製作者連盟事務局長
野 村 正 昭	映画評論家
藤 久 ミ ネ	放送評論家
山 名 泉	すかがわ国際短編映画祭実行委員

【映画功労部門】

掛 尾 良 夫	キネマ旬報映画総合研究所エグゼクティブ・ディレクター
華 頂 尚 隆	一般社団法人日本映画製作者連盟事務局長
出 川 三 男	協同組合日本映画・テレビ美術監督協会前理事長
前 田 米 造	撮影監督、日活芸術学院専任講師
山 口 康 男	アニメーション評論家

(敬称略・氏名 50 音順)

(問合せ先：文化庁 TEL 03-6734-2083)

第8回文化庁映画週間—Here & There

映画でつながろう

映画との新しい出会いがここにある！

- 会期 10月22日(土)～29日(土)
- 会場 六本木ヒルズ+シネマート六本木



東京国際映画祭期間中に開催され、第8回目を迎える「文化庁映画週間」。2011年度では映画をあらゆる角度から取り上げる4つのイベントで構成され、いずれのイベントも立場の異なる人が映画を通じて集う場を提供しています。今年も文化庁映画週間のテーマである「映画でつながろう」を基に、例年大盛況を収めているシンポジウム-MOVIE CAMPUS-を実施します！また、映画の持つ魅力を、映画人ではない著名人が「ナビゲーター」となり独自の視点で語る新感覚カルチャートークショーイベント『映画ナビゲーターズ』も開催。是非ご取材いただけますよう、ご検討ください。

文化庁映画週間公式サイト bunka-cho-filmweek.jp

シンポジウム -MOVIE CAMPUS- 第一部 10月28日(金) 13:00～ 六本木アカデミーヒルズ 49
『今、日本のアニメーション映画の未来を考える』

◆国内外から注目されながら益々多様化している日本のアニメーション!アニメ業界を担う才能たちが集合し、それぞれの立場でアニメの未来をディスカッションする。

アニメーション映画のクリエイションとプロデュースにおいて、これから求められているもの、取り組むべき課題、目指すべき方向についてディスカッションを行います。制作体制を海外に求めながら、国内で制作されるオリジナルアニメーション映画の製作システムやノウハウをこれから若手のアニメーターや監督にどのようにつなげて体系化していくのかを考えます。さらにグローバル化する中で日本のアニメーション映画をどのように海外へつなげて発信していくのか、製作システム、映画祭や海外マーケットの実績や事例などを専門家などの見識を交えてアニメーション映画の未来について考えます。

シンポジウム -MOVIE CAMPUS- 第二部 10月28日(金) 15:20～ 六本木アカデミーヒルズ 49
『映画でつながるために。——風穴を開けつづける映画業界の挑戦者たち』

◆映画業界に大きな影響を与えた先駆者の阿部秀司氏、斬新な切り口でヒットを飛ばす川村元気氏を迎え、旬な新しい取り組みを紹介しながら映画の未来を考える！

映画人である限り、映画の力を信じ、さまざまな角度で映画の可能性を探り続けている。実際に人と映画をつなぎ、大きな実績を作り、映画業界に大きな影響を与えた先駆者と、今までとは違う切り口で、新しいつなぎ方を提案し、新しいビジネスを生み出している映画業界の挑戦者たちと、新しい映画ファンを作るためにはどうするべきかを考え、新たなファンをつなげる視点を映画業界関係者に伝えます。

映画ナビゲーターズ

映画によって影響(インスパイア)されたカルチャーやトレンドをアカデミックな視点で学べるコミュニティカレッジ!映画を新しい次元から垣間見ること、参加者の知的好奇心を刺激するトークイベントを創出します。

◆10月24日(月) 19:00～20:00(予定) (18:30開場) 六本木ヒルズ TIFF movie café

●ゲスト: 本田直之(レバレッジコンサルティング株式会社代表取締役社長兼CEO)

●モデレーター: Sascha(J-WAVE ナビゲーター)

<本田直之流・レバレッジ映画術>

ベストセラー作家でもあり、レバレッジ(てこの原理)を使って新しいライフスタイルや仕事術を独自に生み出し、多くの読者に影響を与え続けている本田直之流のレバレッジ映画術に注目です。

◆10月29日(土) 19:00～20:00(予定) (18:30開場) 六本木ヒルズ TIFF movie café

●ゲスト: 小島慶子(ラジオパーソナリティー)

■このリリースに関するお問い合わせ先: 公益財団法人ユニジャパン(前田、渡辺)

TEL: 03-3553-4792 yoshiko.maeda@uni-japan.org saki.watanabe@uni-japan.org

第8回文化庁映画週間 —Here & There

※更に詳しいチラシもまもなく完成します。

情報掲載をご検討いただけますよう、宜しくお願いいたします。



Here & There

Bunka-Cho Film Week

<p>10月22日(土) 18:00~</p>	<p>■平成23年度 文化庁映画賞贈呈式 ※招待者のみの参加になります。</p>	<p>六本木ヒルズ グランドハイアット東京 コリアンダー2F</p>	<p><映画功労部門> 岡安 和子(分野:映画・TVフィルムネガ編集) 金田 正(分野:スチール) 兼松 熙太郎(分野:映画撮影監督) 小林 七郎(分野:アニメーション美術) 笹竹 利行(分野:映画美術文字デザイン) 高嶋 利雄(分野:映画照明) <文化記録映画部門> *作品は下記をご参照ください。</p>
<p>10月23日(日) 10:50~</p>	<p>■平成23年度 文化庁映画賞受賞 記念上映会 [文化記録映画部門 受賞作品] 文化記録映画部門受賞3作品の受賞記念上映会を実施します。</p>	<p>シネマート六本木 スクリーン1</p>	<p>・文化記録映画優秀賞 10:50~「夢と憂鬱~吉野馨治(けいじ)と岩波映画~」 14:10~「里湖(さとうみ) 八郎瀧物語」 ・文化記録映画大賞 17:00~「ショージとタカオ」</p>
<p>10月28日(金) 13:00~</p>	<p>■シンポジウム —MOVIE CAMPUS— <入場無料/事前申込制></p>	<p>六本木アカデミー ヒルズ49 タワーホール</p>	<p><第一部> 「今、日本のアニメーション映画の未来を考える」 ●ゲスト: アニメーション映画監督(交渉中) 布川郁司(株式会社ぴえろ代表取締役) 鈴木亜矢(アニメーター) 氷川竜介(アニメ評論家) 風早完次(東映アニメーション海外ライセンス事業部) ほか ●モデレーター: 岡本美津子(東京藝術大学 映像研究科 アニメーション専攻 教授) <第二部> 「映画でつながるために。」 ——風穴を開けつづける映画業界の挑戦者たち」 ●ゲスト: 阿部秀司(株式会社阿部秀司事務所/ 株式会社 ROBOT 創業者・顧問) 川村元気(映画プロデューサー) 梅津文(GEM Partners 株式会社代表取締役)ほか ●モデレーター: 斉藤守彦(映画ジャーナリスト)</p>
<p>10月24日(月) / 10月29日(土) 19:00~(18:30開場) 予定</p>	<p>■映画ナビゲーターズ <入場無料/事前申込制></p>	<p>TIFF movie café</p>	<p>24日ナビゲーター: 本田直之 (レバレッジコンサルティング株式会社 代表取締役社長兼 CEO) モデレーター: Sascha (J-WAVE ナビゲーター) 29日ナビゲーター: 小島慶子 (ラジオパーソナリティー)</p>